

右の写真がお分かりでしょうか。内田先生が話された大賀ハスの花托のズーム写真です。花托からニョキニョキ伸びているのは雌しべで、花托の周りにたくさんある細いのが雄しべです。開花時の花托と雌しべは眩い原色の黄いろで、仏教の発祥地インドを彷彿させます。受粉後の雌しべは引っ込むようになってしまい、それぞれが果実(種)となります。花弁は散り、雄しべもなくなり、くすんだ緑色の花托だけになります。ハスはインド原産とよく言われますが、生物学的には原始的な植物で、列島が大陸から分離する前に既に日本にも咲いていたようです。



ハス:開花時の花托

乙巳の変で中臣鎌足とともにクーデターを画策した蘇我倉山田石川麻呂は、演題の「石川年足」の祖父の伯父にあたります。鎌足の活躍は、日本書紀編纂者の不比等への忖度によるもので、蘇我一族内の主導権争いの方が主因だったかも知れません。そう考えると、壬申の乱で近江朝側だった不比等が、肅清されずに出世が叶ったことも頷けます。

乙巳の変後、石川麻呂は右大臣となりますが、蘇我日向の讒言で、長男とともに山田寺で自害して家系は絶えてしまいます。冤罪だったことが判明し、弟の蘇我連子が天智政権下で右大臣を務め、そのひ孫が「年足」となるわけです。

年足が歴史に登場するのは天平7年に従五位下昇叙が最初ですが、この時すでに48才です。それ以前の記録はなく、父の石足がその5年前に従三位で薨去しており、蔭位制を考えれば遅い昇叙と思います。父が亡くなった年の初めには「長屋王の変」があり、政局が不安定だったことも関係するかもしれません。父の私設秘書でもしていたのでしょうか。

大和中央が幾多の政権抗争のあげく、律令制度を固め、国司を派遣して地方統治を始めました。それでも出雲は特別に国造が認められ、大社の祀りが続く“神聖国家”であり、出雲に派遣される国司は、国造を中心とした地元勢力の前でお飾りの存在だったのではないかと思っていました。また、上淀麿寺の壁画に見られるように、山陰は半島や大陸と、大和を介さない独自の関係を結んでいた先進地域であることも知っていましたが、そもそも上淀麿寺が仏教寺院であり、神道と仏教の双方が違和感なく存在していた認識は薄かったように思います。

出雲守であった年足はその善政を褒められています。善政とは詔に先行する仏教寺院の建立とも考えられているそうです。これは、年足が国造に臆することなく中央の意向を推し進めたか、或いは寺院建立を地元も共感して実現できたかのいずれかです。どちらにしても出雲では神仏の融合が穏やかに始まり、特に仏教は神道と別の信仰(宗教)としてではなく、先進文物や社会の理解を補助する役割として受け入れられていったのではないのでしょうか。

ハスで象徴される仏教の伝来は538年(日本書記では552年)とされていますが、それは大和中央の見解に過ぎず、北九州や山陰にはそれ以前から、多くの僧を含む渡来人によって活気づいていたと思います。四代目の国司として赴任した年足ですが、彼は中央から託されて出雲の人たちを教化したというよりも、大和でも体験できないような海外の文物や知識があふれていた出雲の地で、好奇心が満たされるのを楽しんでいたのかも知れません。



上淀麿寺復元図

国分寺建立詔が出た3年後に東海道巡察使に任じられ、さらに3年後の747年に、七道を数人で分割して指導に廻っています。国司として赴任した出雲が含まれる山陰道を担当した可能性がありますが、還暦の60才に達していた年足には少し酷使だったかもしれません。

落ち着いたかと思った中央政界ですが、不比等の孫の藤原仲麻呂が暴政を振るいだし、光明子の威光をバックに令外官である紫微中台を設立します。なんと紫微中台のNo.2である大弼の位に年足を担ぎだします。石川の家系は、先進、改革の精神に富んでいた人たちだったのかも知れません。或いは、秩序に照らした自らの境遇に満足できない中大兄皇子や藤原仲麻呂にとって、石川麻呂や年足は、急ごしらえの体制下でも的確に対応できる有能な行政官だったのかも知れません。